

FD 推進事業 2022レポート



	1. 総括	1
	2. FD推進事業実施方針	2
	3. FD推進事業	3
	4. FD推進事業の企画・実施スケジュール	5
	5. 参考資料	7
	6. FD委員会委員名簿	10



1. 総括

「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(2021(令和3年)1月中央教育審議会答申)では、目指すべき教職員の姿として、「技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割」を果たすことが掲げられている。この答申を受け、教員養成教育においても、現代的な諸課題に柔軟に対応できること、自ら目標を定めて学び続けること、子供の学びを引き出すファシリテーターとしての役割を務められることといった、新たな資質・能力を備えた教員の育成が求められる。

一方で、大学教育においては、コロナ禍という外的状況を受けてオンライン授業などの新しい学習形態が浸透した。さらに、学修履歴を情報として蓄積し、学びに活用するためのLMS(ラーニングマネジメントシステム)の実装も進められている。このように、学びを取り巻く環境はこの数年で一気に様変わりした。

鳴門教育大学においても、新たに求められる教員養成を見据えて、第4期中期目標・中期計画期間(2022(令和4)年度～2027(令和9)年度)において、学びのスタイルを従来の規準適応型から自己伸張型へと切り替える取組を始めている。従来の教員養成では、教員として必要な資質・能力や技能をあらかじめ指定し、その習得を図る規準適応型のスタイルが標準であった。これに対して、本学が新たに取り入れる自己伸張型の学修スタイルでは、学生が自ら目指したい教員像を思い描き、そのために必要な知識・技能の習得を自分で設計していく。こうした学修を具体化して進めるため、2022(令和4)年度には伸ばすべき資質・能力の方向性を示す「鳴門パースペクティブ」を開発し、2023(令和5)年度からは学生の学修履歴の蓄積を行う「学修成果・経過可視化システム」の運用を開始する。

「学修成果・経過可視化システム」は、自己伸張型教員養成を推進するための有効なシステムであるが、そこに蓄積される学修履歴をどのように活用するかは学生自身と、その支援にあたる大学教員に委ねられる。学生や大学教員には、学修履歴として保存されたデータを評価し、運用する能力が必要とされるのである。

第4期中期計画では、学修履歴として保存されるデータの評価規準や、評価システムの開発を目標に掲げ、「新社会を担う教員の資質能力に関する新たな教員養成スタンダードの開発及びそれに応じたルーブリックの開発」を具体的課題として設定している。これを受けて、FDもこうした新たな学びのスタイルに対応する授業形態を模索する必要が生じている。

このような現状を踏まえて、2022(令和4)年度のFD推進事業は、自己伸張型教員養成の様々な局面で実施されるパフォーマンス課題の開発と、その中で蓄積される学生の学修成果や学修履歴を評価するための基礎知識を共有することを狙って、以下のテーマを設定した。

テーマ：教員養成教育における個別最適化した学修の実現
—自己伸張型教員養成を実質化するためのパフォーマンス課題と評価について—

2022(令和4)年度FD推進事業では、大学における評価指標やルーブリックの開発に携わってこられた飯尾健氏(徳島大学講師)を講師として招き、ルーブリック開発の基礎を学ぶ研修を企画した。ルーブリックは、学生の学修履歴に対する評価基準としてだけでなく、日々の授業においてもパフォーマンス課題を評価するための評価システムとしても活用できる。そうした評価装置の意義、作成方法を共有することで、2023(令和5)年度以降に「学修成果・経過可視化システム」が稼働した際に、教員がとまどうことなく活用できるための基礎固めを図った。事後アンケートでは、研修内容について90%以上の回答者が肯定的に捉えており、概ね適当であったと評価される。

研修方法は、対面会場とオンラインのハイブリッド方式で実施し、参会者の多くはオンライン上から参加した。事後アンケートでは、研修方法についても90%以上が肯定的に回答しており、次年度以降に同様の方法で実施できる目処も立ったと考えられる。

2023(令和5)年度には「学修成果・経過可視化システム」が稼働し、学生は自己伸張型(セルフデザイン型)の学修スタイルで学び始める。これらの学生の学びを支援するためのソフト開発やシステムの充実も、今後の課題となるだろう。

鳴門教育大学では、第4期中期目標・中期計画期間（2022（令和4）年度～2027（令和9）年度）において、【学修成果可視化・セルフデザイン型学修】の推進を掲げている。具体的には「新たな教員養成スタンダード及びそれに応じたルーブリックの開発」が課題となる。

この課題を受けて、2022（令和4）年度のFD推進事業は、セルフデザイン型学修の導入を見据え、蓄積される学生の学修履歴を評価するためのルーブリック作成をテーマとして設定した。

第4期中期目標・中期計画

中期目標前文（抜粋）	関連する中期計画
<p>【ミッション】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 学校教育を、ICTをはじめとする技術革新と多様化・グローバル化が急激に進展する社会で生きていく子供にとっての社会的共通基盤（インフラストラクチャー）として位置付け、教員養成は、これを担う専門職業人の育成を通して、今後の社会発展と人間のウェルビーイングの実現を左右する重要な位置を占めるものと捉えている。 ■ 「令和の日本型学校教育」の実現という課題を見据えながら、教員養成大学として果たすべき基礎的な使命を「未来の社会の担い手である全ての子供の可能性を引き出す学校教育の実現」と捉え、これを情報化社会、多様化社会を見据えて実現していくために、本学における教育、研究、社会との共創等の側面での一層の機能強化を図る。 <p>【教育の重点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 今後の学習観・指導観の転換を担う教員のあり方として、教師としての主体的に学ぶ力を有し、子供の多様性や教育課題の複雑さに対応した教育実践を創り出していく教師（創造的実践者としての教師）の養成をねらいとした教育体系の構築を図る。 ■ 全学DX計画の中で教師としての主体的な学びを支援するシステム（教員養成学修可視化システム）の開発と運用を行い、新たな教員養成のモデルを構築し発信する。 <p>【教育委員会、学校等の支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新たな教育課題に対応したICT利活用、多様性教育、教科横断的教育等の方策に関して、教育委員会、学校等のニーズにきめ細かく応えて研究開発を行う仕組みの構築を行い、学校等における教育課題の解決に寄与する。 ■ また、教育委員会との連携を一層強化し、現職教員研修の高度化と効率化を支援する。 	<p>【教職大学院遠隔教育プログラム】 現職教員や教員免許を保持している社会人等が無理なく働きながら学び続けるための機能を強化した遠隔型教職大学院プログラムを設置し、教職大学院での学修が可能なシステムを構築する。</p> <p>【グローバル教員養成】 文化的多様性教育の資質向上を図るため、教職大学院生（現職教員）を対象に、JICAとの連携による開発途上国の教育者（研修員及び外国人留学生）と共に学ぶ学修プログラムを新たに構築する。</p> <p>【「令和の日本型学校教育」に対応する教員輩出】 ICT活用教育、多様性教育、教科横断的教育等に対応したカリキュラムを開発・実施し、学校現場における新たな教育課題に対応するコンピテンシーを身に付け、第4期中の学校現場において必要とされる教員を輩出する。</p> <p>【学修成果可視化・セルフデザイン型学修】 新社会を担う教員の資質能力に関する新たな教員養成スタンダード及びそれに応じたルーブリックを開発し、これに基づきデジタルデータの統合による学修可視化システムの開発・運用により、教師としての基盤的能力とともに学生個々の教師としての特長を確認、伸長する教員養成教育を推進する。</p> <p>【四国国立5大学連携教職課程】 地域ブロックレベルでの教員養成機能の効率化・高度化を両立（最適化）する「広域分散協働型教員養成モデル」として、四国全5国立大学における「大学等連携推進法人」を活用した「連携教職課程」を設置し、教育の質保証を担保した運営を推進する。</p>



3. FD推進事業

(1) 開催概要

日時	2023（令和5）年2月1日（水）16:20～17:50
場所	鳴門教育大学総合学生支援棟3階F会議室（Teams参加可）
対象者	鳴門教育大学全教員（参加者43名／全教員121名）
テーマ	教員養成教育における個別最適化した学修の実現 ー自己伸長型教員養成を実質化するためのパフォーマンス課題と評価についてー

趣旨と論点

本学では、第4期中期目標・計画期間において、規準適応型教員養成から自己伸長型教員養成への転換をめざしており、2023（令和5）年度からは「鳴門スタンダード」から「鳴門パースペクティブ」へ教員に求められる資質・能力の体系の再編成を行い、「鳴門教職コンピテンシー」（学校現場で活用できる教師としてのコンピテンシー）と「鳴門トランスファラブルスキル」（広く社会で活用できる汎用的なスキル）で構成される新たな体系のもと、「令和の日本型学校教育」が必要となる学校現場において新たな教育課題に対応できる教員の養成に邁進することとなる。

さらには、教員養成教育における学修成果と課題の可視化を実現する統合的LMSの開発と学部教育における運用を掲げている。この取組は、学生の目標設定・学修・省察と改善のプロセスで蓄積される様々な学修履歴をデジタル化し、ラーニングアナリティクスを活用してそれらを教員と学生が共に読み取り、交流しながら、教員養成教育における個別最適化した学修を実現し、教員として主体的に学ぶ力を学生自らが高めていくことを目指している。

こうした自己伸長型教員養成を実質化していく上で、大学の授業を一層アクティブ・ラーニング化していく必要があり、そのための手段の一つとしてパフォーマンス課題の設定とパフォーマンス評価の方法について理解し実践できることが大学教員に求められている。また、学生の学修履歴である実習録や「学修キャリアノート」（鳴門教育大学版学びのポートフォリオ）等の質的データを教員が読み取り、学生個々の成長を見取っていくためには、パフォーマンス課題とその遂行の成果を適切なルーブリックにより評価する力量も必要となる。

以上から、多くの教員がルーブリックについての基本的理解と共通認識を持ち、次の二点に関わる基本的力量を高めることを目的として、本事業を開催する。

- ①アクティブ・ラーニングを促す学修課題を設定し、学修成果を評価する力
- ②学生の「学修履歴」に係る質的データを適切に読み取り評価する力

プログラム

時間	次第	登壇者
16:20～16:25	開会挨拶	佐古秀一学長 (司会：山田芳明学部教務委員会委員長)
16:25～16:40	趣旨と論点説明	幾田伸司FD委員会委員長
16:40～17:30	講演「ルーブリック作成入門」 (オンラインによる講演)	徳島大学飯尾健講師 (SPOD講師派遣)
17:30～17:45	質疑応答	
17:45～17:50	閉会挨拶	梅津正美理事・副学長

研修風景





(2) 受講者アンケート結果



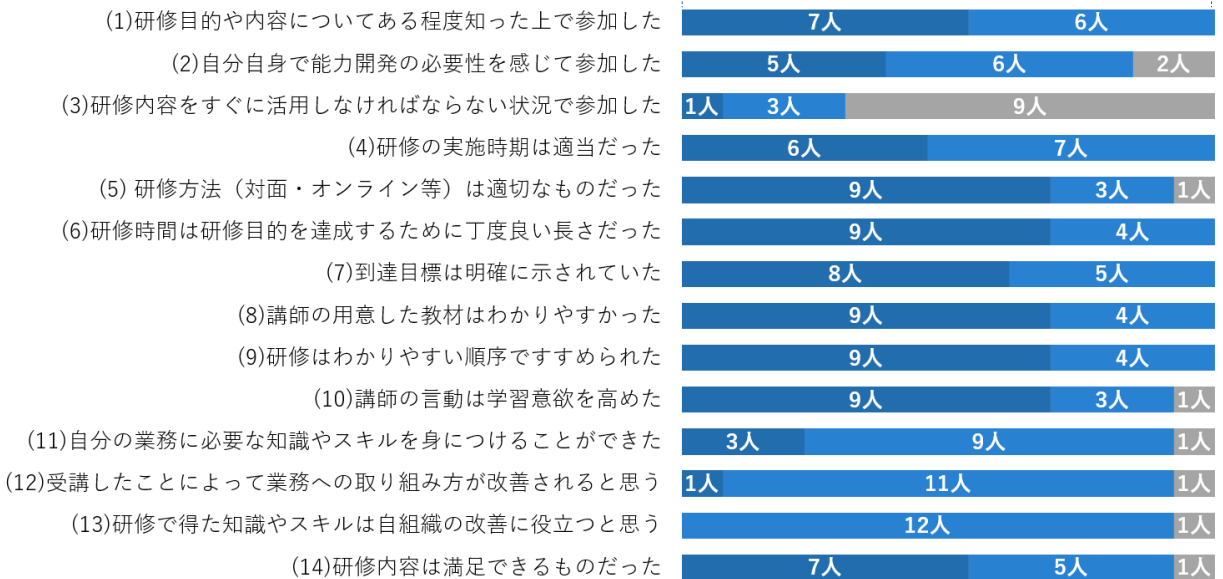
鳴門教育大学全教員121人



参加者数43人



アンケート回答者数13人



■④ そう思う ■③ どちらかといえばそう思う ■② どちらかといえばそう思わない



模擬授業をやるクラスを担当してきたので、ルーブリックを使った評価法は大いに参考になりました。



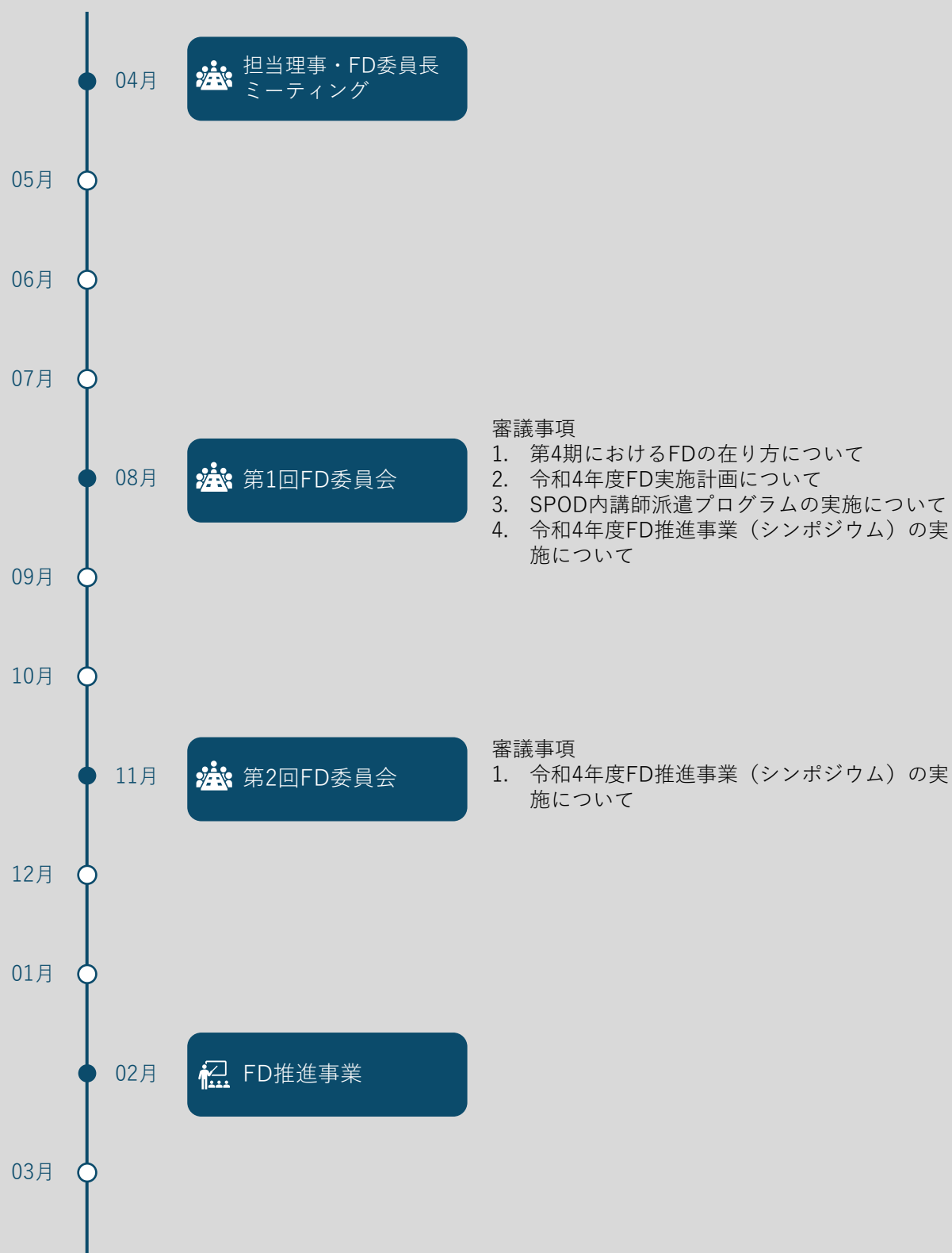
ルーブリックは作ってしまって終わりではなく、学習集団に応じて改善する必要があることが示されていた点が良かった。



同じルーブリック評価を用いても、教員と学生で異なる（甘め）という経験談が、自分の授業の場合と同じで腑に落ちました。



4. FD推進事業の企画・実施スケジュール





5. 参考資料

（1）大学設置基準等の改正（2022（令和4）年10月1日）



文部科学省

大学設置基準等の改正（令和4年10月1日）：「組織的な研修」（のうち教育改善＝FD）という概念で再整理された。

大学設置基準

（組織的な研修等）
第11条
2 大学は、学生に対する教育の充実を図るため、当該大学の授業の内容及び方法を改善するための組織的な研修及び研究を行うものとする。

大学院設置基準

（組織的な研修等）
第9条の3
2 大学院は、学生に対する教育の充実を図るため、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法を改善するための組織的な研修及び研究を行うものとする。

専門職大学院設置基準

（組織的な研修等）
第5条の2
専門職大学院は、学生に対する教育の充実を図るため、当該専門職大学院の授業の内容及び方法を改善するための組織的な研修及び研究を行うものとする。



（独）大学改革支援・学位授与機構

【認証評価実施要項（令和6年度適用）】
基準2-5：組織的に、教員の質及び教育研究活動を支援又は補助する者の質を確保し、さらにその維持、向上を図っていること。
分析項目2-5-4：授業の内容及び方法の改善を図るためのFDを組織的に実施していること。



（一財）教員養成評価機構

【教職大学院認証評価基準（令和6年度適用）】
基準6-2：教育研究上の目的を達成するために、組織的に研究する環境を備え、またFDに取り組んでいること。
観点6-2-2：教職員の協働によるFDの活動組織がどのように機能し、日常的にどのような活動を行っているか。



SPOD

（四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）

加盟校（鳴門教育大学）への各種FD支援

取組内容

FD・SD共通

- 1 SPODフォーラムの開催
- 2 コンサルティング・講師派遣事業
- 3 FD・SDに関する調査研究
- 4 情報提供サービス

FD

- 1 FD担当者の養成
- 2 新任教員研修の実施、公開
- 3 ティーチング・ポートフォリオ研修の実施
- 4 各加盟校におけるプログラムの公開

SD

- 1 SDプログラムの体系的・段階的・継続的实施
- 2 次世代リーダー養成プログラムの実施
- 3 講師養成によるSDの継続的な実施
- 4 SPOD-SDCの輩出



鳴門教育大学

第4期（令和4年度～9年度）は、「令和の日本型学校教育」が必要となる学校現場において新たな教育課題に対応できる教員の養成を推進するため、教員養成教育における個別最適化した学修の実現を目指している。

【第4期中期計画・戦略例（教育関連）】

- ⑨-(1) 教職大学院遠隔教育プログラム
- ⑨-(2) グローカル教員養成
- ⑩-(1) 「令和の日本型学校教育」に対応する教員輩出
- ⑩-(2) 学修成果可視化・セルフデザイン型学修
- ⑬-(1) 四国国立5大学連携教職課程

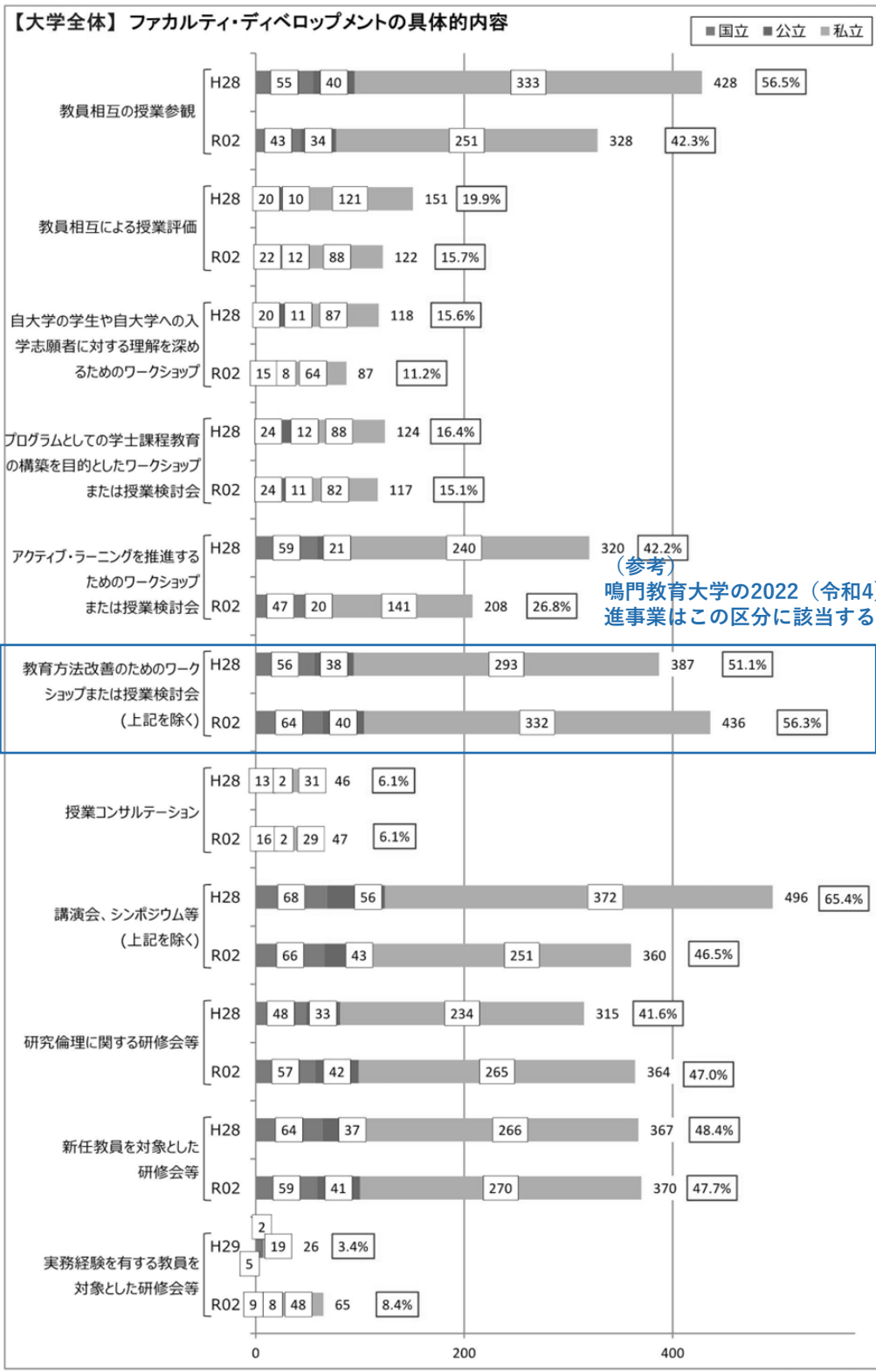
FD委員会

大学のミッション・ビジョン・中期目標・中期計画に掲げる第4期の戦略を実現・加速させるために、鳴門教育大学の教員に必要な資質能力向上を目指すFDを展開する。



(2) 令和2年度「大学における教育内容等の改革状況について」調査結果（文部科学省）

<5-B ファカルティ・ディベロップメント(FD)>
①ファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施状況



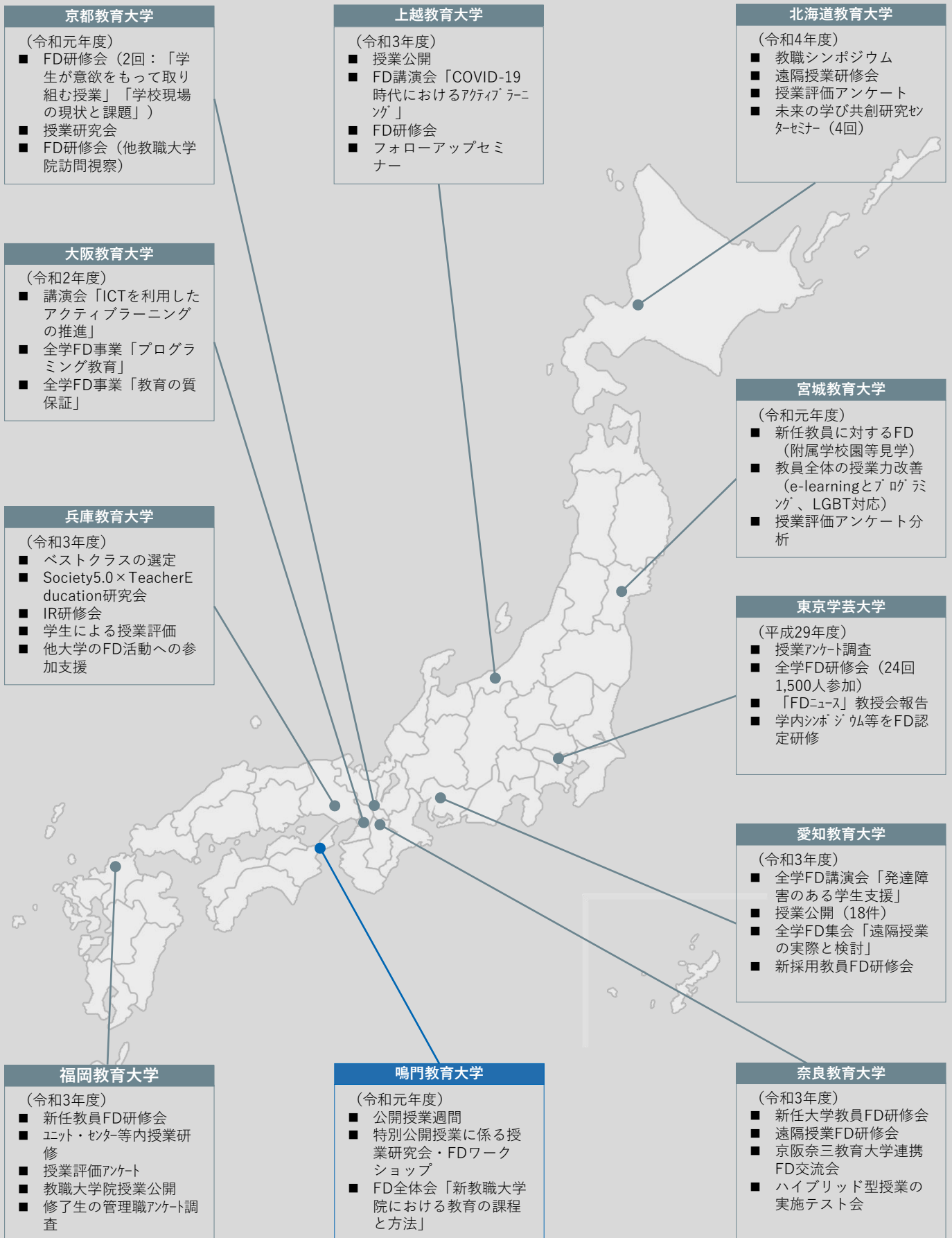
(参考) 鳴門教育大学の2022(令和4)年度FD推進事業はこの区分に該当する。





5. 参考資料

(3) 11教育大学のFD活動例（認証評価受審結果から参照）





6. FD委員会委員名簿

氏名	職名	備考
幾田 伸司	特命補佐 (教師教育研究・FD担当)	委員長
武田 清	専攻長 (人間教育専攻)	
内藤 隆	専攻長 (高度学校教育実践専攻(教科・総合系))	
小坂 浩嗣	専攻長 (高度学校教育実践専攻長(教職系))	
吉井 健治	副専攻長 (人間教育専攻)	
原田 昌博	副専攻長 (高度学校教育実践専攻(教科・総合系))	
福井 典代	副専攻長 (高度学校教育実践専攻(教科・総合系))	
川上 綾子	副専攻長 (高度学校教育実践専攻(教職系))	
山田 芳明	特命補佐 (学部教育・連携教職課程担当)	
梅津 正美	副学長 (教育・改革担当)	オブザーバー